## 【授業科目】細胞診断学演習 I (総論) Practice of Diagnostic Cytology I (Generals)

担当	教 員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィス アワー	教職員への 授業公開
牛丸 一樹、金子	浩秀、岩井 宗男 千之、中村 広基 、平澤 浩	4 年次 前 期	自由	3	135	演習	あり	巻末 掲載	可
授業概要 (内容と進め方)	授業概要/細胞検査士養成課程を目指す者にとって、臨床細胞学総論 I および II 、臨床細胞学演習を学修した上で、細胞診断に 関わる全般的知識を学ばせる。細胞診断を行う上で必要な検体処理法、染色法を始め、顕微鏡の種類と扱い方、免疫組織化学、 FISH 法などについて教授する。さらに、細胞診断に関連する新たな診断技術についても紹介し、実社会において進化する医療技 術を獲得できる能力を養わせる。 課題に対するフィードバック方法/レポート提出を課した場合は、提出されたレポートにコメントを付けて返却する。								
実務経験に関する 授業内容	細胞診専門医、細胞検査士の臨床経験をもつ教員が、細胞検査士養成課程の学生に必用な実践的な細胞診断総論の知識および技術について、細胞診断学の資料・教材を交えながら講義および実技指導を行う科目である。								
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。								
到達目標 (履修者が到達 すべき目標)	①顕微鏡の種類、特徴、取扱い方などを理解できる。 ②細胞判読に必要な病理組織学を理解できる。 ③検体採取法、検体処理法、染色法、標本作成の流れを理解できる。 ④細胞診におけるスクリーニング法、診断基準について理解できる。 ⑤試薬管理、安全対策、電子顕微鏡技術、セルブロック法、 FISH 法などの手法を理解できる。								
時間外学習に必要 な学修内容および 学習上の助言	<ul> <li>毎回の授業に対する予習、復習を必ず行うこと。</li> <li>本講義で学んだ知識は、標本の作成、検鏡などに必要であるため、実際に標本作成などのための実習を十分に行う必要がある。</li> <li>1回の講義または実習につき、60分程度の予習および180分程度の復習を行うこと。</li> <li>※上記時間については、指定された学修課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間(2単位15回科目の場合:予習+復習4時間/1回)(1単位8回科目の場合:予習+復習4時間/1回)を取るよう努めてください。</li> <li>詳しくは教員の指導に従ってください。</li> </ul>								
授業計画	第 3~4 回 顕微 第 5~6 回 細胞 第 7~8 回 細胞 第 9~10 回 検体 第 11~12 回 検体 第 13~14 回 染色 第 15~16 回 染色 第 17~18 回 細胞 第 21~22 回 細胞 第 23~24 回 細胞 第 25~26 回 細胞 第 27~28 回 細胞 第 29~30 回 試薬 第 31~32 回 細胞	法(特殊染色、 診標本作成の流 診標本作成の流 診スクリーニン 診スクリーニン 診の診断基準 診写真撮影法 管理、安全対策	、取扱い法 理組織学① 理組織学② 引法、捺印法 塗抹)、 LBC ウ染色、 か免疫染色) れ②(染色、 が法① が法②	など) 法 ザ染色) 付、固定、塗 顕鏡)	抹)				白澤白白平岩平岩牛牛馬澤白中平金金石田石石澤井澤井丸丸場田石村澤子子
評価方法 評価基準	成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 授業態度 20% 学期末試験 80%								7F. 1
教科書	『細胞診を学ぶ人のために 第6版』医学書院、 『スタンダード細胞診 第4版』医歯薬出版、 『細胞検査士細胞像試験問題集 第2版』医歯薬出版								
関係する 他の科目	基礎生物学、解剖組織学、病理学、病理検査学、臨床細胞学総論Ⅰ、臨床細胞学総論Ⅱの基礎知識を必要とするため、これらの科目を十分学修する必要がある。								
学生への メッセージ	<ul><li>・ 細胞検査士養成過程を選考した学生にとっての必須科目である。</li><li>・ 細胞検査士認定試験に合格することを覚悟し、十分な学修を行うこと。</li></ul>								